

「続・薬禍の歳月 薬害サリドマイド事件 60 年」を観て

この番組（2025 年 3 月 15 日放送）は、2015 年に NHK で放送された「薬禍の歳月」の続編である。日本におけるサリドマイダー（サリドマイドの被害者）は約 300 人。その多くが 60 歳を超え、足を手の代わりに使うことによって生じる「過用性障害」をきたしている。股関節などの障害が、非サリドマイダーに比べ、10 ～ 20 歳前倒しで起こっている。

国の研究班の班長であった医師が 2019 年に、274 人のサリドマイダーを調査し、そのような二次障害の結果を発表し、対策強化が必要と訴えたのだが（Hinoshita F Birth Defect Research 2019;111:1633）、国は何も対策を取っていない。1974 年に、原告である被害者と被告である国と製薬企業（現、住友ファーマ）との間で交わした和解文書に、「将来、新たな障害が生じた場合には、両者が誠実に協議し解決する」という一文がある。今回の特集で、二次障害を新たな障害と認めるかという NHK の質問に対して、国は回答せず、製薬企業は「企業単独では判断できない」としている。加害者は、和解をしたことで、「知らん顔できる」（サリドマイダーの言葉）のである。

番組は、サリドマイダーである増山ゆかりさんが、事件の発端の地であり、最大の患者を抱えるドイツを訪問する姿を追う。ドイツでは、事件発生から 50 年の節目の年にサリドマイダーたちが製薬企業の前で抗議集会を開き、それをメディアが大々的に取り上げたことで、多くの市民から、「彼らは被害者ではなく、自らの運命を切り開いた人たち」として尊敬を集めた。そして、1000 万円以上の年金を獲得した。その結果、特注の家具・家電・車いすや簡単に入れる特殊な風呂を備えた家に住めるようになっている。彼らは「（年金の獲得は）救済ではなく、権利の行使です」と言う。一方、日本では患者団体いしずえが製薬企業から得た資金を元にサリドマイダーに支給している助成金は年間 25 万円が上限だそうだ。この彼我の差には頭がくらくらする。

本誌は、2002 年の第 7 号で、薬害の歴史シリーズの③でサリドマイドを取り上げ、増山さんに記事を書いてもらっている。23 年前のその記事中にすでに「被害者は腰痛や手のしびれなど二次障害に悩まされている」との記述を見つけ、胸をつかれた。HPV ワクチン、新型コロナワクチンの害が問題となっている現在、再び薬害の歴史を振り返る特集が必要ではないかと思いながら番組を見終わった。